

〔研究ノート〕

## 郭沫若から三木清氏宛書簡

藤田梨那

### 序

郭沫若（1892年—1978年）の文学作品、歴史研究、古代文字研究のほとんどは、1980年代から90年代にかけて出版された人民文学出版社版『郭沫若全集』文学篇・歴史篇・考古篇に収められている。書簡は『三葉集』（『郭沫若全集』文学篇所収）を除いて、大部分は以下の出版物に収録されている。

『桜花書簡』 四川人民出版社 1981年

『郭沫若書信集』 中国社会科学院出版社 1992年

『郭沫若致文求堂書簡』 文物出版社 1997年

『郭沫若佚文集』 四川大学出版社 1988年

近年、郭沫若に関する史料調査が進められ、新たに上記全集及び書簡集に未収録の文献、書簡が多く発見された。ここに挙げるのは、郭沫若が日本の一市民に宛てた一通の書簡である。

### 一、郭沫若の三木清宛書簡

2009年、岡山県立美術館において「日中友好の懸橋——郭沫若展」（6月—8月）が開幕した。この展示会は日中友好を促進するために開催された。一方、郭沫若（1892—1987）は、岡山と深い繋がりをもった人物である。1914年に留学のため来日し、1916年から2年間岡山第六高等学校に学んだ。戦後、1955年郭沫若は代表団を率いて岡山を訪問し、その後も岡山との友好交流に尽力した。展示会は中国郭沫若記念館、岡山県立美術館、山陽新聞社、聚友日中友好交流促進会との共同開催であった。会場には郭沫若の岡山ゆかりの史料、書簡その他の品物が展示された。

展示物の中の一通の手紙が、筆者の目を惹きつけた。昭和31年3月11日付け、郭沫若から岡山の一市民である三木清氏宛、毛筆で綴った日本語の書簡である。以下は手紙とその内容の解読である。（図1，2）

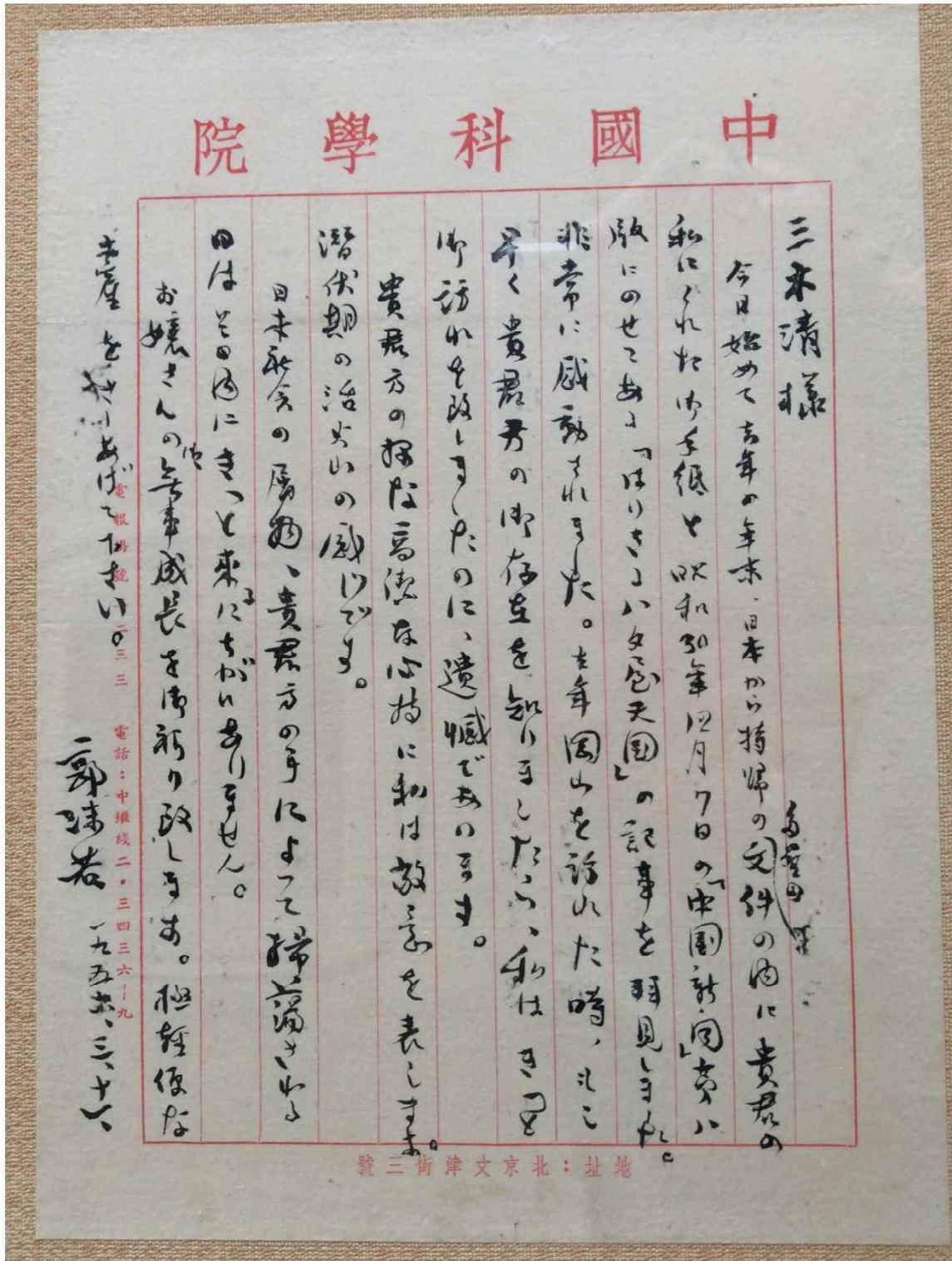


図1、吉備路文学館所蔵



図 2

三木清様

今日始めて去年の年末、日本から持帰の多量の文件の内に貴君の私にくれた御

手紙と昭和 30 年 12 月 7 日の「中国新聞」第八版にのせてある「はりきるハタ屋（バタ屋）天国」の記事を拝見しました。非常に感動されました（ママ）。去年岡山を訪れた時、もし早く貴君方の御存在を知りましたら（ママ）、私はきっと御訪れを致しましたのに、遺憾であります。

貴君方の様な高潔な心持に私は敬意を表します。潜伏期の活火山の感じですよ。

日本社会の屑物、貴君方の手によって掃蕩される日はその内にきっと来るにちがいないありません。

お嬢さんの御無事成長を御祈り致します。極軽便な土産をさしあげてください。

郭沫若 一九五六、三、十一、

手紙の日付は 1956 年（昭和 31 年）3 月 11 日とある。「去年」とは昭和 30 年のこと。この年、郭沫若は日本学術会議の招請に応じ、中国科学代表団団長として、12 月 1 日から 26 日にわたり訪日した。一行は東京に到着し、東京、千葉県市川（郭沫若が亡命期に居住した地）、京都、大阪を歴訪した後、14 日に岡山に到着した。約 40 年ぶり、かつて留学した地を再訪したのである。岡山大学を訪れ、講演を行った。また留学中にたびたび遊んだ後樂園にも足を運んだ。六高同窓会のメンバーで、岡山日中友好協会の人々とも歓談した。岡山訪問はたった一日、日程はたいへん詰まっていた。代表団は、行く先々で盛大な歓迎を受けた。郭沫若は母校を再訪、同学たちと再会して感激のひと時を過ごした。しかしその中で一通の封信がそっと彼の手に渡された。岡山の一市民、三木清氏からのものである。三木氏は当時、大病をして入院中の身で、郭沫若を歓迎する場にはいなかった。彼は知人に頼んで、手紙と一枚の新聞記事を郭沫若に渡した。それは、郭沫若の手紙にある「御手紙」と昭和 30 年 12 月 7 日「中国新聞」掲載の記事「はりきるバタ屋天国」のことである。

しかし、熱い歓迎ムードとハードスケジュールのなか、郭沫若は、三木氏の手紙を開く暇がなく、そのまま中国に持ち帰った。そして帰国後によく三木氏の手紙を読んだ。

## 二、「バタ屋」人生に感動

三木氏に宛てた手紙に郭沫若は、「中国新聞」第八版の記事「はりきるハタ屋（バタ屋）天国」を読んで、非常に感動したと書いている。この記事は、昭和 30 年 12 月 7 日「中国新聞」第八版に掲載されたルポルタージュである。この新聞は現在、岡山県立図書館に所蔵されている。記事の副タイトルは、「善良で自由な日課 ゴミに埋れた“人生観”」とある。当時岡山鉄道局庁舎敷地裏の空地に築いた 17 世帯のバタ屋の生活を紹介している。バタ屋とは、いわば廃品回収業のことである。17 世帯はバタ屋村を作り、その村長が三木清氏であった。記事

の紹介によると、「三木清さん（52）は海軍軍属としてラバールで終戦を迎えたが、敗戦のみじめな地獄生活がたたって内地に帰還してみると肺を侵されていて、名古屋大府国立病院（ママ）で療養生活に入ったが、後から押しよせる同病者のために完全治療を待たないでベッドを離れ、山口県の土工飯場に身を置いて社会復帰をしたが、あまりにも封建的な暴力労働にたえかねて、配給通帳をそのままとしてヒョウ然として放浪の旅に出た。病弱ではあったが三木さんの強みはかつてラバールで野生の芋とパパイヤの汁で生命をつないだ地獄生活の体験で、食物に対しての強い抵抗力がつけられていた。岡山に住みついたのは、この地にはナワやワラグズ、破れムシロを喜んで買ってくれる製紙会社があったからであるという。」この記事から、三木清氏は、戦時中、軍属としてラバウルに出兵していて、当時 52 歳だということが窺い知ることができる。ラバウルは南洋パプアニューギニアのニューブリテン島の一都市で、第二次世界大戦時に一時期日本によって占領されていた。三木氏は戦後帰国してから、肺結核で入院した時期があった。社会復帰がうまくいかず、ついに屑屋になった。言うまでもなく三木氏は戦争に駆り出され、戦後も安定した仕事にありつけず、いわば社会の最下層に属する者であった。

記事の最後に、三木氏の当時 5 歳の娘についても触れている。ある時、娘は誤ってゴミのなかから拾った毒物の錠剤を口にして、危篤となり病院に担ぎ込まれた、という。

この記事は、当時の日本社会の一側面の現実を反映しているのは勿論であるが、その目的は三木清氏を通して、社会の最底辺にいても人生を自由に生き、社会や仲間感謝する生き方を紹介する点にある。

第二次世界大戦について、アジア諸国の人々は、実に複雑な思いを抱いている。郭沫若も例外ではない。しかし、彼は「はりきるバタ屋天国」を読んで、「非常に感動した」という。彼は、戦後復興期の日本の下層社会の現実を、この記事に見て取り、その中で懸命に生きる人々を発見したのではないか。そして、三木氏の人生観に彼は感動したのではないか。彼はさっそく三木氏に手紙の返事を書いた。手紙に三木氏を讃え、その「高潔な心持に私は敬意を表します」と記した。手紙の最後に見られる三木氏の娘への言及もこの新聞記事に基づいたものと推測する。そして娘さんへと御「土産」を手紙に同封して送った。その御「土産」は花の刺繍と蝶をあしらった一枚のハンカチーフであった。（図3）



図 3

三木清氏は、郭沫若からもらった返事にたいへん感激した。当時郭沫若は、中国政府の要人のひとりで、中国科学院の院長も兼任していた。いわば中国の政治を束ねる政治家の一人であった。そのような人が日本の一市民に自ら筆を執って返信を認めるとは思いもよらなかった。三木氏は郭沫若から直筆の手紙と御「土産」のハンカチを、昭和 57 年中西寛治氏に委託するまでずっと大切にしていた。

### 三、吉備路文学館への寄託

郭沫若が三木清氏に送った手紙とハンカチは、現在岡山県の吉備路文学館に所蔵されている。(図 1、図 2、図 3) 実は、郭沫若の手紙の公開は前後二回、1982 年（昭和 57 年）岡山高島屋「大中国展 郭沫若遺墨展」と前述の 2009 年、岡山県立美術館「日中友好の懸橋——郭沫若展」とにおいてである。二度の展示会は、27 年隔たっている。筆者が目にしたのは第二回の展示会ということになる。

三木清氏が郭沫若から書簡をもらってから 26 年経った頃、昭和 57 年 5 月 12 日、「中国新聞」にひとつの記事が掲載された。タイトルは「秘蔵の手紙を提供」(図 4)。



高島屋で開幕した。中西氏はさっそく三木氏から提供された郭沫若の書簡を展示会に出品した。この展示会は5月13日から18日まで。郭沫若の手紙は、三木氏に送ってから26年後に世に公開された最初である。しかし展示期間は6日間と短期間であったため、あまり人々に注目されなかったようである。

三木氏から中西氏への提供について、もう一つの記述がある。昭和58年（1983年）8月6日「朝日新聞」掲載「日中架け橋へ新たな資料 貧しさに負けるな」である。記事には昭和30年、31年の三木氏と郭沫若の手紙を紹介している。特に三木氏の手紙についてその内容を一部紹介している。「新中国は貧乏人にとって大変よい世の中になっている。苦しいながらも一生懸命に働いて、子どもを育てています。日本も早く、貧乏人が幸せになれるような国になれば、」との内容の手紙をわたされたという。ここから三木氏が敢えて面識のない郭沫若に手紙を書いた動機が読み取れるのではないか。

では、郭沫若のこの手紙はどのように三木清氏の手から吉備路文学館に移されたのか。吉備路文学館は、昭和61年（1986年）に中国銀行が設立した文化施設である。当時、中国銀行の頭取である守分勉氏は文化、芸術にも多大な関心をもち、岡山日中友好協会の役員も務めておられた。中西寛治氏と共に日中友好協会の活動を推進していた。吉備路文学館開設の際、中西氏から岡山ゆかりの中国文学者郭沫若の三木清氏宛書簡とハンカチーフを吉備路文学館に移蔵した。この書簡が初めて展示されてから4年後のことである。

郭沫若が訪日した昭和30年は、まだ日本と中国は国交を回復していなかった時期で、日中交流は民間レベルでしかできなかった。その中で、郭沫若は様々な形で両国の交流を模索していた。昭和30年の訪日もその模索の一環である。彼と三木清の交流はほんの小さな出来事であったかもしれない。しかしこのような些細な出来事を通して、互いに対する理解が深まっていく。昭和47年に日中国交正常化が実現し、今日まで至っている。日中両国民の努力がひとつひとつ積み重なって、いまの友好関係を支えてきたと言える。そういう意味で、ここに見る郭沫若の書簡、郭沫若と三木清の交流は、日中両国の友好関係を支えてきた礎の一つを担うものと言えるのではないか。

現在、中国の北京郭沫若記念館で『郭沫若全集』補編の編纂が進められ、全集に漏れた作品、文章、書簡を収集してきた。三木清宛のこの書信も収録されることになった。また、間もなく出版される『郭沫若書法集』にも収録されるようになり、郭沫若の遺墨としても歴史にその足跡を留めることになる。

三木清宛書簡を調査する際に、吉備路文学館にご協力をいただきました。ここに謝意を表す。

（ふじた りな・教授）